

京都府舞鶴市布敷地区所在の弥勒堂に伝わる如来坐像の修復報告

仲 隆裕・岡田文男・水谷 誠・李 宣周 (歴史遺産学科)

山崎隆之 (本学客員教授・愛知県立芸術大学名誉教授)

目次

はじめに

一・舞鶴市布敷地区と弥勒仏

(一) 沿革

(二) 弥勒仏に関する史料

(三) 舞鶴市布敷地区に伝わる仏像についての所見

二・如来坐像の保存修復

(一) 本学に仏像を搬入

(二) 学生による調査作成

(三) 学生による仏像の修復

三・如来像の材質調査

(一) 如来像のエックス線透視調査

(二) 漆箔の顕微鏡観察

おわりに

はじめに

京都造形芸術大学歴史遺産学科では、けいはんなの関西学術研究都市における歴史遺産総合調査や、京都寺町通りに所在した寺院における文書調査など、学科創設時より地域貢献型演習授業に取り組んできた。平成二十四・二十五年の二か年間は「行動する歴史学」をキーワードに掲げ、東日本大震災被災資料の救出・保存事業、京都市内剣鉾調査、京都府舞鶴市布敷の弥勒仏保存修復事業等について、三年次生対象の演習科目「歴史遺産学演習Ⅰ」において実施した。本稿は、このうち京都府舞鶴市布敷の弥勒仏保存修復事業について報告するものである。

一・舞鶴市布敷地区と弥勒仏

(一) 沿革

布敷は、京都府北部にある舞鶴市内を流れる伊佐津川の支流である池内川右岸に位置し、近世においては丹後国加佐郡布敷村と称した。享保年間には田辺藩池ノ内代官の官下であり、石高一四八石余、家数五一、人口は一六三名であった。明治二十二年に今田・堀・池内下・別所・上根・寺田・白滝・岸谷と合併して池内村となったが、村役場は布敷に置かれた。昭和十一年に舞鶴町と合併し、昭和十三年から舞鶴市の大字となり現在に至っている。

「池内」は南北朝から室町期にかけての保名でもあり、『加佐郡誌』によればその名の由来は、往古、五老岳の山崩れによって川が堰き止められ池となったことによるという。なお、この時、白布を敷いたような大滝ができたことから「布敷」の地名が生まれたとされる。

布敷自治会では、平成二十一年度に地域活性化のために舞鶴市地域づくりサポート制度モデル地域の採択を受けて地域ビジョンを策定し、以後様々な取り組みが行われている。その一環として、地域に所在する弥勒堂の屋根修理が行われた。このとき堂内に安置されている弥勒仏が雨漏り等によって損傷していることが確認されたことから、弥勒仏についても保存修復を行うことになり、本学歴史遺産学科がその委託を受けた。

平成二十四年(二〇二二)一月三十一日、本学歴史遺産学科山崎隆之客員教授(愛知県立芸術大学名誉教授)、同教授岡田文男、同仲隆裕の三名が現地に赴き、布敷ビジョン実行委員長ほか布敷自治会役員立会いのもと、弥勒堂ならびに布敷地区墓地内にある文殊堂の安置仏の現状調査を行った。

調査の結果、山崎の見解では弥勒仏については右手首、裳先の欠失はみられるものの、仏像の木地はしっかりしており、損傷自体は比較的軽微であった。これらのことから、本学歴史遺産学科の授業において山崎による指導のもとで学生が欠失部位を補い、さらに漆箔を押しすることが可能であると判断した。

また、文殊堂の文殊菩薩像については、過去に保存修復が検討されたものの実施に至らず、現在御身代わり仏が安置されている。弥勒仏の保存修復に合わせ、この機会に文殊菩薩像についても保存修復を行いたいとの地元の要望を受け、両像を本学歴史遺産学科において保存修復を行うこととした。

なお、彌勒仏については平成二十六年三月に保存修復を終え、同年四月十三日に彌勒堂に戻され、高福寺住職によって入魂式が執り行われた。文殊菩薩像については平成二十六年三月現在、保存修復を継続中である。

(二) 彌勒仏に関する史料

彌勒仏に関してこれまで学術的調査は実施されていない。彌勒仏に関する史料としては、昭和十五年（一九四〇）に彌勒堂の木札に記載されていた「彌勒堂宇由来」を当時の布敷区長の仲省が記録した文書がある。以下にこれを示す（二部を新字体に改めた）。

彌勒堂宇ノ由来

丹城ノ東郊ニ出テ流レテ遡ツテ上ルコト幾ンド二里計リニシテ布敷ノ邑トナス。邑ノ中ニ彌勒堂一字ヲ存ス是レ即チ何歳誰レ人ノ草創ナルヲヤ知ラザルナリ。古誌ヲ按ズルニ往昔乱兵境ニ入ツテ一邑悉ク兵火ノ為ニ災イラス。茲レニ因ツテ堂宇モ一時ニ回祿ス。時ニ里人怪キ異光ヲ見ル者有リ。議シテ之レヲ尋ヌルニ、即チ慈氏ノ尊像儼然トシテ而モ斯ヲ灰塵ノ中ニ得タルナリ。衆人此レヲ觀テ未嘗有ナリト讚歎セザル無シ。遂ニ一字ヲ建立シテ其ノ像ヲ堂上ニ安置ス。之ニ依ツテ幽俚ノ男女歸依渴仰ノ念ヒヲ作シ更ニ年々一會ヲ設ケ専ラ香ノ因ヲ詰ンデ現ニ慈尊三會ノ曉ヲ待ツカ。然リト雖モ星霜已ニ久シク堂宇老朽シ尊像破壊ス。此時ニ當リ僧寛立邑ノ長字四郎ト二人主トシテ復セズンバアルベカラザルコトヲ思ヒ化（貨）ヲ十方ニ募リ一邑相共ニ力メテ之ヲ革メ創ル。尊像モ亦タ更メ新ニス。時ニ貞享ニ乙丑年十一月二日ナリ。然シヨリ己ノカタ居諸既ニ百年ニ垂トシ安永年中ニ至ル。斯ノ時邑中ノ善男子等棟宇ニ撓トシテ勢ヒ久シ難キヲ見テ仍リ乃チ爲メニ往復較量シテ之ヲ革メ造ラント欲スルモ財力共ニ乏シキヲ如何セン。此ニ於テ數歳ノ間他郷僻幽ヲ厭ワズ普ク化シテ更ルク斯ヲ相爲ス。或時ハ早晨星ヲ戴テ出デ暮ニハ露ヲ蹈ンデ還ル。又或時木ヲ伐リ材ヲ出シテ以テ之ヲ割合ス。厥ノ巧勞艱難勝テ數フベカラズ。今日本安永七戌年十月二十四日工ヲ鳩メ材ヲ量テ之ヲ經始ス。而シテ同年臘月朔日造り成ルコトヲ是ノ日隣峰ノ主盟及ビ山野ヲ請シ堂ニ就テ大法ヲ演説シ專等當境歸依ノ善男善女及ビ十方化縁ノ信俗等此眼力ニ乗ジテ終ニ龍會上ノ春ニ

坐センコトヲ祈ル者也。伏テ惟レバ厥ノ堂爲ル哉。萃麗嚴飾ニシテ斯レヲ舊制ニ視ブルニ大ニ逕庭アリ。皆以テ邑中ノ赤心熱腸ナル者カ。予不敏ト雖モ聊カ堂宇ノ來由ヲ誌シ以テ後人ニ告クルナリ。永ク修創ヲ加ヘ以テ後代ニ傳ヘバ則チ現存ノ厚福。亡者ノ離苦。爾シ豈ニ其ノ功ノ甚ダ大イナラザランヤ。此レヲ記ト爲ス。

維時安永七龍集著雍關戌年臘月吉旦

高福七世現從 家山叟誌

庄主 長五郎

年寄 宇四郎

願主 當村若者中

「彌勒堂宇ノ由来」は、安永七年（一七七八）の彌勒堂再建時に記されたものである。これによると布敷村の彌勒堂の創建年代は不明であり、ある時戦乱で焼失したが慈氏（彌勒）の尊像は焼け残った。この時、彌勒像は灰の中で光り輝いており、村人はこれを未曾有のことと讚嘆して彌勒堂を再建した。以後、彌勒像は人々の信仰を集め篤く供養されてきたが、彌勒堂は老朽化し彌勒像も破損したため、貞享二年（一六六五）に彌勒堂が再建され、彌勒菩薩も新たに作り直されたという。さらに安永七年、財政困窮の中で村民が力を合わせて彌勒堂が再び再建された。

上記の記事が事実を伝えているとすれば、布敷には江戸時代以前から彌勒仏が祀られていたが、現在の彌勒仏は貞享二年に新たに作り直されたものであるとみられる。安永七年に彌勒仏が再び作り直されたものかどうかについては記述がないが、修理が施された可能性はあると思われる（以上、他）。

(三) 舞鶴市布敷地区に伝わる仏像についての所見

彌勒堂に伝わった伝彌勒菩薩坐像について

本像は、古来彌勒菩薩として信仰されてきたが、図像的にはやや特異な部分がある。一般に、彌勒には菩薩形と如来形があり、菩薩形としては半跏思惟像のほか坐像または立像で左手に宝塔を載せた蓮華を執るもの、坐像で両手を脚上で重ね、宝塔を執るものがある。如来形は釈迦如来とほぼ同形で、宝塔は執らない。しかし、本像は如来形ながら左手に宝塔を執る。これは、本像が本来

別の如来像であったものが改変されたことを示している。本像は左手の指が曲げられていることから前身像は葉壺を持った薬師如来像であったと考えられる。

前出の弥勒堂の棟札に記載されていたという「弥勒堂宇ノ由来」よれば、貞享二年（一六六五）に老朽化した旧堂に代えて新堂を建立し、その際に仏像も新造したという。本像がこの時のものとすれば、それは完全な新造でなく、他の古像を造り変えたものということになる。実は、本像の台座の裏にも「千手観音」の墨書があり、これも転用されたことがわかる。本像が改造されたとすれば実際に造られたのは貞享二年以前となるが、様式的には江戸時代であり、それも寛永期（一六二四～四四）を遡るものではない。

本像は、全体のプロポーションは良く、顔つきも穏やかで、衣の表現も的確である。作風的には地方作特有の個性はなく、よく整っており、一種の品格も感じられる。おそらく京の都で造られ、運ばれたものであろう。

文殊堂に伝わる文殊菩薩坐像について

本像は獅子座に乗った半跏像である。文殊菩薩像は普賢菩薩像とともに釈迦如来の脇侍を構成するが、智慧の文殊として独尊で信仰されることも多い。本像は様式的には弥勒堂本尊より新しく、江戸時代中ごろ～末の作とみられる。ただ、台座の獅子に比べて像が小さく、本来の像が失われたため補われた可能性も考えられよう（以上、山崎）。

二．如来像の保存修復

本学歴史遺産学科の保存修復演習授業で布敷地区の仏像を修復した経過を時系列に沿って左に解説する。

（一）本学に仏像を搬入

二〇一二年一月三十一日

仲、山崎、岡田の三名が布敷地区を訪問し、弥勒堂ならびに文殊堂に安置された仏像について現状を確認し、略測、写真撮影を行った（写真1・2）。

二〇一二年四月二日

仲、山崎、岡田、歴史遺産学科三回生二名（水谷誠・普代桃子）の計五名

が布敷公民館を訪問し、弥勒堂に安置された伝弥勒如来像と文殊堂に伝わる文殊菩薩像の梱包作業を行った。梱包した仏像は後日、仲が本学に搬入した。

（二）調書作成（歴史遺産学科・保存修復演習1授業）

山崎・岡田担当の保存修復演習の授業において如来像と文殊菩薩像を教材として、仏像の種類と時代様式、法量の計測方法の説明を山崎が行なった（写真3）。

仏像の現状調査（二〇一二年四月十二日）

仏像の現状調査と修理仕様について、左のとおりに観察を行った。

本牀の形状

肉髻相を表し螺髪を彫出する。肉髻珠、白毫相を表し、耳朶は環状で三道を彫出する。顔を前に向け、結跏趺坐する。両手は屈し、左手は膝上に置き、五指を緩めて宝塔を執る。右手は前にして五指を伸ばす。

品質構造

松材寄木造。内刳。肉身金泥、衣漆箔。玉眼。

構造は頭体別木の挿し首で、頭部は前後二材、体部は前後三材で左体側、右膝奥に各一材を寄せ、両脚部、裳先（欠）を短く。右手は肩、肘、手首（手首先欠）、左手は袖口を別材とし、手首先を差し込む。内刳は像底に及ばず、平面をなす。

損傷状態

（イ）表面の漆箔の汚損、風化が進み、衣の腹部から脚部にかけて緊迫が剥落していた。

（ロ）右手首先と左手の指先、裳先が欠失していた。

光背

光背は輪光と柄の二部からなる。光背の輪光は漆箔仕上げであり、像の背面にある柄は黒漆塗りで漆箔は押されていないかった。

（イ）柄の柄部の木質が劣化し、接合部に緩みが生じ機能しなくなっていた。

（ロ）全体に亘り埃をかぶっていた。

（ハ）金箔、漆塗り部の風化が進み、漆箔部が剥落し素地が露出している箇所

所があった。

台座

台座は蓮華座で、上から迎蓮、反花、框、受座、台輪、框の六段で、各六方矧ぎ寄せである。台輪の各面に雲文を施し、雲文の周囲を砂子地とし、正面から見える部分は漆箔仕上げであり、背面は黒漆塗のままであった。

(イ) 框の矧ぎ目が緩み、離れていた。

(ロ) 全体に亘り埃をかぶっていた。虫の卵や巣が付着していた。

(ハ) 金箔、漆塗り部の風化が進み、金箔や漆箔部が剥落し素地が露出して、いる部分が各所に見られた。

修理仕様書

共通する部位

(イ) 埃などの清掃をおこなう。

(ロ) 表層部の剥離している箇所にはフノリを用いて剥落止めを行う。

(ハ) 素地が露出している箇所には堅下地を施し、漆箔または金泥の古色仕上げとする。

本躰

(イ) 左腕、袖の部分の漆箔剥落部には漆箔を施す。

(ロ) 欠失する右手、手首の接続部は松材で補足し尊容を整える。

(ハ) 欠失する左手の第三指、第四指の指先は松材で補足し尊容を整える。

(ニ) 欠失する裳先の先端部は松材で新補し尊容を整える。地付の部分には元来の像底に倣い布貼りをおこなう。

(ホ) 持物など小欠損が見られる箇所には、漆木屎を用いて補足し尊容を整える。

光背

(イ) 柄を機能させるため柄を新たに補足し、竹釘を用いて固定する。新補の柄は堅下地、漆箔仕上げとする。

台座

(イ) 虫の巣や卵の除去をおこなう。

(ロ) 脱落している框座を接着し、漆箔仕上げをおこなう(以上、山崎)。

(三) 学生による仏像の修復

如来像の法量計測(二〇二二年四月十九日)

如来像の各部位の計測結果を表一にまとめた。

本躰：像高、頭頂～顎、髪際～顎、面幅、耳張、面奥、肘張、膝高左、膝高右、膝奥、裳先奥を計測した。

右、膝奥、裳先奥を計測した。

光背：光背は輪光背で、全高、輪光の直径、輪光幅、輪光厚を計測した。

台座：六角形の蓮華座であり、蓮肉厚、蓮肉径。台座と像高を合わせた高さ

表 1 如来像の法量

部位	法量 (cm)	
全高	76.3	
本躰	像高	38.2
	頭頂～顎	12.1
	髪際～顎	7.7
	面幅	12.6
	耳張	9.1
	面奥	10.0
	肘張	24.3
	膝高左	6.4
	膝高右	6.4
	膝奥	23.5
裳先奥	28.7	
光背	全高	49.4
	輪光径	26.8
	輪光幅	2.7
	輪光厚	1.3
台座	蓮肉厚	10.3
	蓮肉径	38.1

写真撮影(二〇二二年四月二十六日・写真4)

如来像・文殊菩薩像の写真撮影を行った。各仏像の部位の名称、保存状態について山崎が説明を行った。

クリーニング(二〇二二年五月十日・写真5)

仏像表面および台座にたまったほこりを筆で掃き取った。台座下框は六枚の板を矧ぎ合わせており、一部が緩んでいたことから、いったんすべて取り外し、再接着することにした。台座内面のクリーニングを行い、内面を観察したところ、台座内面に「千手観音」、「宥鏡」(?)の墨書があった(写真6)。前者はこの台座が本来千手観音像に付属していたことを窺わせ、後者は僧侶の名前であろう。さらに、「千手観音像」の文字の下部に、文字と直交する方向に「象」の戯画が描かれていた(写真7)。

剥落部分の仮留め（二〇二二年五月十七日～三十一日・写真8）

仏像表面および台座表面の漆箔が浮き上がって剥がれかかっている箇所を、フノリの二パーセント水溶液を用いて仮留めを行った。光背は輪光と緩んだ柄を解体し、部材ごとにフノリで剥落留めを行った。

台座框の接着（二〇二二年六月十四日・写真9）

台座框は六枚の板を矧ぎ合わせていたが、矧ぎ合わせ面が緩んでいたため、膠を用いて接着した。六枚の板の角が合うように板材を配置し、接着箇所を確認したうえで、三千本膠を前日から水に浸して軟化させたものを加温して三〇パーセント濃度に調整し、それを六角形に組み立てた。接着後、木の歪により接着面に間隙の生じた箇所があり、そこに桧の薄板を挟んで膠で固定した。

欠失部の補作（二〇二二年六月二十八日～二〇二四年三月、担当：水谷誠）

光背の柄の取り換え

如来像光背の柄の柄が摩耗して輪光が前に傾き、螺旋に接していた。そこで、柄を桧材で新補した。

裳先の新補（写真10）

如来像の裳先が欠失していたため、大学院生の李宜周が桧材を用いて裳先部分の新補を担当した。

右手首先の補作（写真11）

坐像の右手は手首から先が欠失していたため、現存している左手を参照して手の大きさを決め、桧材で補作した。通常、江戸時代の仏手は厚みが少なく、本像の手も厚みの少ない仏手にした。

左手第三指・第四指の指先の補作（写真12）

左手第三指、第四指の先端が欠損していたことから、桧材で欠損部分を補作した。

補作部分の漆塗装と金箔押し（担当：李宜周）

台座框の接合後、砥粉を水で耳たぶ程度の柔らかさに練り、ついで等容量の生漆と混ぜて錆漆を作り、接着の隙間を充填した。ついで、框外面に

錆漆を塗布後、黒漆仕上げとした。錆漆の上にテレビン油を混ぜた漆を塗り、錆漆の色を落ち着かせた。その後、砂粉地の欠失部に砂を蒔き、錆漆の剥落部位には漆下地を施したうえ、金箔を押し、古色仕上げとした（写真13・14）。

右手の手首より先、左手の第三・第四指の先端について錆漆を施した後、ベンガラを混和した赤みを帯びた漆を塗布後、表面を消粉仕上げとした（写真15・16）^②。

裳先の補作部分、衲衣部分の金箔剥落部分に漆を塗布し、ついで金箔を押しした（写真17・18）。像底は板で塞がれており、その上に布が貼られ、さらに黒漆が塗布されていたことから、補作部分にも麻布を貼ったうえで黒漆を塗布した。

修理報告書を作成するため、仏像の修復前・修復後の写真（写真19）をもとにトレーシングペーパーを用いて図を起こし、修理箇所を明示した（図1～図3参照）。

三、如来像の材質調査（二〇二二年五月三十日）

（一）如来像のエックス線透視調査

エックス線透視撮影の結果、鉢内納入物は確認できなかった。同時に、矧ぎあわせ部分を鋸で留めていることが判明した。鋸の位置を図3に示した。材の露出部分が少なく、試料を採取していないが、目視によると材は桧材の可能性が高い。

（二）漆箔の顕微鏡観察（二〇二二年七月十二日）

剥落した漆箔片をもとに漆箔断面の薄片を作製し、透過光による顕微鏡観察を行った。漆箔断面の観察にあたり、試料をエポキシ樹脂（主剤：アデカレジック EP4200、硬化剤：アデカハードナー43332、配合比5:1）に包埋し、試料断面を垂直に研磨して、最初に反射光による観察を行い、写真撮影を行った。次いで研磨した面を鉱物用スライドガラス（厚さ：2ミリメートル）に包埋用エポキシ樹脂で接着し、試料の厚さを約20ミクロンメートルまで研磨して、生物顕微鏡ならびに偏光顕微鏡、走査型電子顕微鏡により観察を行った。

主な観察点は

- ① 反射光による塗膜断面の色調の観察ならびに修理の有無の推定
- ② 透過光観察による下地混和物の種類の推定
- ③ 走査型電子顕微鏡 (HTTACHI-Miniscop-1M 1000) による金箔層の観察 (以下、SEM像と略す) と同顕微鏡付属のエネルギー分散型エックス線分析装置 (Swift ED-TM) をもちいて元素の成分分析 (収集条件: 収集時間100秒、プロセスタイム4、加圧電圧15KV) である。

左に漆箔断面の下地、漆層、金箔について、反射光、透過光、SEM像の観察結果ならびにEDSによる元素分析の結果を解説する。

顕微鏡観察により、下地層は三層 (写真の赤い矢印) よりなり、微細な結晶が均一に分散していた (写真20)。下層のほう为上層よりもやや色が濃くなっていた。この部分を走査型電子顕微鏡付属のEDSにより元素分析した結果、カルシウムを検出した。このことから、下地構成材料は貝殻胡粉であると推測した。層による色味の違いは油煙類を混和した結果とみられる。ついで、漆箔部分の観察を行った。走査型電子顕微鏡による観察では、箔は単層であるが箔が重なる部分も認められた。EDSによる元素分析の結果、箔は金が主成分であり、わずかに銀を含んでいた (以上岡田)。

おわりに

舞鶴市布敷地区に伝わる如来像を本学歴史遺産学科でお預かりし、約二年間かけて修復と剥落片の自然科学的調査をさせていただいた。修復は仏像修復・古典技法の研究を専門とする山崎の指導のもと、学部生と大学院生が中心になって進めたものである。本物に直接触れ、しかも修復作業に最初から最後まで関わることは、学生にとって大変貴重な経験であり、また自信となったはずである。さらに、二〇一四年四月十三日には舞鶴市布敷地区の公民館において仏像修復作業の報告会、ならびに入魂式が行われ、学生・教員ともども参加させていただいた。地元の方々に修復結果をたいへん喜んでいただくことができた。このことは、地域の文化遺産継承を教育目標とする本学歴史遺産学科の学生・教員にとっても大きな喜びであった。ちなみに新補を担当した学生は本修復作業に参加したことがきっかけとなって、仏像修理を専門とす

る修復工房 (公益財団法人美術院) に就職することになった。このように歴史遺産学科内において実物を通じた修復作業を行えたことは、それに直接かわった学生のみならず、後輩にとっても大きな刺激となったことと思われる。

謝辞

舞鶴市布敷地区に伝わる如来像を修復する機会を与えてくださった舞鶴市布敷地区自治会の関係者の皆様方に、衷心より御礼を申し上げます。

註

- (1) 文字の解説は歴史遺産学科の坪井剛講師による。
- (2) 漆塗装および消粉の扱いについて本学非常勤講師の北村繁氏よりご指導をいただいた。



写真1 弥勒堂における如来像の調査 (2012.1.31)



写真2 文殊堂における文殊像の調査 (2012.1.31)



写真3 学生による調書作成・法量計測 (2012.4.19)



写真4 処理前の写真撮影 (2012.4.26)



写真5 台座のクリーニング (2012.5.10)



写真6 框の内側の観察台座内面に書かれた墨書、「千手観音」と「宥鏡」か? (2012.5.17)



写真7 台座内面隅に描かれた象 (2012.5.17)



写真8 フノリによる剥落とめ (2012.5.17)

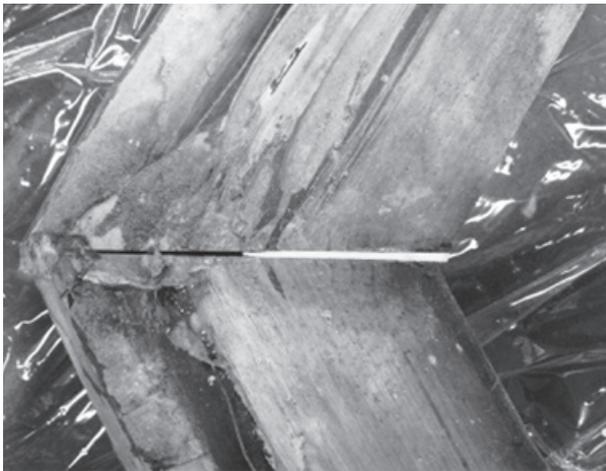


写真9 緩んだ台座框の接着 (隙間に薄板を埋めた)



写真10 裳先の欠失部の補作



写真11 右手首先の補作 (左: 右手先の欠失状態、右: 補作)



写真 12 左手第3指・第4指の先端の欠失部分の補作 (左: 正面、右: 補作後)



写真 13 台座砂子蒔き部分 (左: 剥落、中: 砂を蒔く、右: 金箔を押す)



写真 14 台座の漆剥落部分 (左: 漆を塗布、中: 金箔を押す、右: 古色仕上げ)



写真 15 右手先の漆箔仕上げ (左: 下地付け、中: 黒漆塗布、右: 消粉仕上げ)

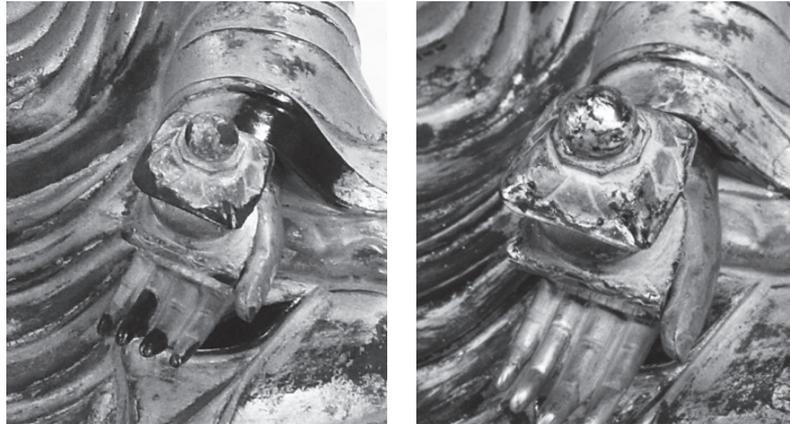


写真 16 左手指先 (左：黒漆塗、右：消粉仕上げ)



写真 17 箔押し作業 (左：箔を切る、中：金箔を置く、右：古色仕上げ)



写真 18 裳先 (左：漆塗布、中：金箔押し、右：古色仕上げ)



写真 19 台座、本尊の修復完成 (左：修復前、右：修復後)

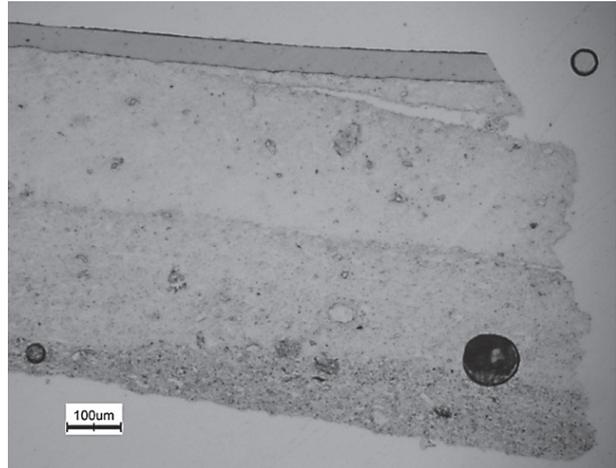


写真 20 塗膜断面の顕微鏡写真 (透過光)



図 1 修理個所の部位 (斜線部)

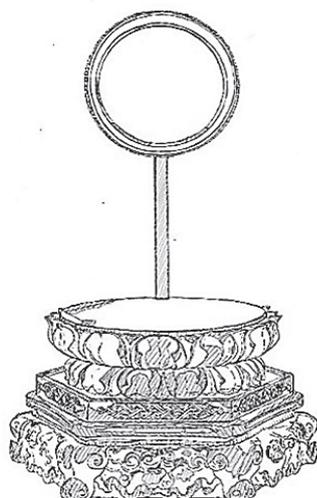


図 2 台座・光背の修理箇所 (斜線部)



図 3 鍔の部位